

研究センターニュース第72.73号

2007年度総会開会あいさつ

あらためて“つながり”を強める努力を

地域と協同の研究センター代表理事 水野隼人



総会にご参加いただき、有り難うございます。

私ども研究センターは、2006年度それぞれの地域の会員、組合員のみなさんと研究センターがどこまで力を合わせ、力強く一つひとつの地域での会員のつどいやシンポジウムなどをつくりあげるといふ点で努力してきました。この点で、2006年度は一步一步前進してきた1年ではなかったのか、そんな実感をもって今日の総会を迎えることができました。みなさんのご努力、ほんとうに有り難うございました。

最近の新聞を見ますと、あきれような事件がいろいろ起こっていますが、あきれているわけにはいかないわけで、怒りを持続させることが大切ではないかと思っております。同時に、では私たちはどうするのが問われます。

2007年度に入って、5月には生協法が改正されました。この改正に照らし、私たちが2006年度進めてきたことの大切さが、あらためて確認できるのではないのでしょうか。

一つは地域で生協が頼られているということです。地域では現実に、一人ひとりが、一緒に考え、暮らしをつくっていく場が必要とされています。生協という組織には、それを応援することが求められている、と生協法改正は言っているのじゃないかと思えます。もう一つは、それぞれの地域で生協が大きくなって組合員もたくさんになって、いろんな考え方が参加できるようになっています。そうしたなかでの生協の“ガバナンス”ってなんだろうか、どういう風にそれを構築していったらいいのか、この点が私たちに問われています。今までの延長だけではなく、これからの生協運営のあり方について考えてみる必要がある、そう思っています。

そうした意味では、私たちは昨年一年間、「つながり」というテーマをかかげ、地域のなかで改めて“協同”が必要ですね！と言ってきたのですが、そのことの大切さが、生協法改正でも裏打ちされたといっているのではないのでしょうか。この1年間私たちが進めてきたことをもっと発展させるためにも、組合員のなかの“つながり”を、もっともつくり上げていきたい。そのために地域と協同の研究センターも一緒になって、地域の方々ともつながられるようにしていきたいと思っています。このテーマをかかげて3年目になりますが、今年は、これをより強め、さらに2008年に向けていろいろ努力していきたいと思っております。そのような今年度の計画につきましても、ご議論いただきますことをお願いして開会のご挨拶といたします。



特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

地域再生と協同組合の新しい可能性

地域と協同の研究センターの2007年度通常総会(7/7)にあたり、記念シンポジウムとして「地域再生と協同組合の新しい可能性」をおこないました。ここでは、シンポジストの中京大学社会学部の小木曾洋司先生(研究センター理事)と広島県生協連専務理事の岡村信秀氏の問題提起を紹介したあと、フロアーからの質問や意見にもとづく議論の概要をご紹介します(文責 編集部)。

組合員が抱えるくらしの問題と協同組合のあり方を結びつける



コーディネーター 向井 忍 (研究センター常任理事; めいきん生協常務理事)

昨年の総会では、格差社会のなかで協同組合は本当に役に立っているかを取りあげました。そして人と人がつながることに、今日の不安や格差を乗り越える力があるのではないかと

考え、3月の東海交流フォーラムでは“人がつながるとき”のテーマで交流し、今回は人がつながるときに、地域の支え合いやそのエネルギーが生まれるのではないかと、挑戦的ですが「地域の再生と協同組合の

役割」をテーマにかかげました。地域なり、社会、あるいは人々のくらしの実相を取り上げ、そこで起こっていることを確認し、そこから地域でのつながりや支え合いの再生を探ること、そして、地域と協同を再生していくという視点から協同組合の新しい役割やあり方を考えるということ、この2つのテーマを結びつけ議論してみたいと思っています。

会場のみなさんからも意見を出していただきながら、議論を進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

問題提起1 地域再生の歴史的 position と協同の意義

中京大学社会学部 小木曾洋司

1 分権化における地域社会への注目

今日は、「協同」を歴史的に考えるというおおがかりなテーマをたてましたが、できるだけ抽象的にならないようお話しするつもりです。私は生協を「外から見る」ことによって、その役割や意義を検証し、岡村さんの報告につなげられればと思います。

地域社会という言葉はよく使われますが、多様な意味や範囲を持たされ漠然としています。暮らしとか生活は個人のことですからわかりやすい。しかし地域社会というのは個々の生活を根本のところまで支えている条件や関係で、明確には意識されにくい。でも意識するしないにかかわらず、個々の生活に影響を及ぼしている。地域社会に関する学生のレポートで、こんな例があがっていました。その学生が小学生の頃引越した。そこでできた友達と遊んでいた時、ゴミを道に捨てようとしたらその友達に怒られた。なぜ怒られたか、その理由は、お父さんお母さんたち、地域の人がみんな掃除しているのに！ということだったんです。人は育つ過程で無意識に地域のあり方に影響を受けています。ある研究者は目が行き届いている地域では、ブランコの高さもケガをしないような高さに調整されているといった例を報告しています。これが地域の実態であり、それは決して抽象的なものではないのです。

その地域社会は歴史的に形成、蓄積されてきたもので

す。明治時代になって、「自然村」が7万2千くらいあったと言われていました。それがどんどん合併されて大きな自治体になっていった。昭和の大合併で3300台にそして今度の平成の大合併で1800台になりました。こうしていろいろなレベルの地域が成立してきたわけですが、再編成されても小さな地域は生きています。そこには、組織や社会関係／人間関係が蓄積されている。それは原理的に言って国家や行政より先に存在しているものですから、地域が再編成されるというのは、国家がその運営に地域を組み込もうとすることです。同時に国家から様々なレベルの地域社会への役割の変更を要請することになります。現在議論されている道州制も同じです。

分権化政策の下で、地域は生活を支える主役に押し上げられようとしています。福祉国家の時代ではもうありません。国に代わって地方自治体が社会的サービスの主体になりつつある。しかし、自治体が社会サービスを提供するための職員を雇って直接サービスを供給するわけではない。それは行政改革に反する。そこで、地域住民組織やNPOがその役割を期待されるわけです。ここに地域の再生という課



70年代の短い福祉国家の時代においてさえ、その政策は不十分でしたから地域は常に何らかの社会サービスを担っていました。その上さらに今回の広域合併によって社会サービスの新しい供給主体として地域は期待されています。そこに行政とのパートナーシップが強調される理由があります。サービス供給の担い手を増やすために、NPO、営利事業体の形成促進、参加方策がどの自治体で進められています。しかし、コムスンの問題に見るように利益、お金が一番大事になると不正が起きる、それはNPOも例外ではない。

社会サービスの供給主体が数量的にも質的にも十分成長していない、しかし行政はそのサービスから撤退するという状況の中で生協ががんばらなくてはならない状態がでてくるのではないかと思うのです。

2 現在の地域再生の歴史的位置

では、地域社会の再生は、住民による公的な社会サービスの肩代わり問題かというところではない。19760.70年代の参加という課題は意思決定への参加を焦点にしていた。つまり、自分たちで何かをするということではなく、行政に対して要求をする、何かを作ってほしい、あれをやってほしい、というスタイルでした。(そのような中で、自分たちの力で、事業を通して自分たちの生活を作るという生協は当時の参加課題を超える運動でもあったように思う)

現在、国や自治体の財政状況から言って、そのような要求をするだけで問題が解決する訳ではなくなっています。それだけでなく環境等現在の時代的制約の枠の中で、住民が自分たちの暮らしを見直しながら、新しい暮らしの形を作り出さなければならない時代を迎えています。ここに地域再生が絡んでくるわけです。

従来、町や村は生活を支えるための人と人の関係を蓄積して、それを文化として継承してきた。それによって人を育ててきた。高度成長以来、開発は作っては壊し、作っては壊しの繰り返される地域を生み出してきた。それは外見の問題ではなく、人を育てる地域社会の本質的な機能を否定したところが一番の問題です。1990年代のグローバリゼーションは全国の商店街を徹底的に衰退させてしまった。小さな自治体が大きな自治体に合併すれば、小さな集落が生き残ることができるようになるかと言えば、そうではない。合併そのものが過疎集落を整理するきっかけになっているのが実態です。従来の積み重なっている人間関係、社会関係がつぶされて行く過程がグローバリゼーションです。その代わり肥大化していくのが「郊外」という生活の仕方です。それは過去と切れた、したがって、地域の文化とも縁のない生活です。人を育てる機能が地域にない。家族生活が基本に

なる暮らしです。

この郊外は1980年代に増えています。この時期に生協は大きく伸びている。生協はこの時期に、郊外に増えていく若い子育て世代を追いかけていく形で伸びました。ところが現在、その家族(生活)そのものが曖昧になりかけている。晩婚化が進み、離婚率も上昇している。少子高齢化が進み、家族を巡る価値観の変化があります。柏木恵子『子どもという価値』(中公新書)で書かれている女性のアイデンティティの変化(調査結果)を紹介します。1970年代末とその10年後の変化です。女性としての個人、妻、母の3つの役割でどれが重要かという質問に対する回答の率の変化を見ると、70年代末においては「母」が半数を超えていて、2位が「妻」、3位が「個人」でした。10年後の80年代末には、1位が3分の1強で「個人」、同じくらいで「母」、「妻」はあまり変化なしです。要するに女性の自分を大切にしようとする志向は圧倒的に強まっているわけで、それを無視して家族関係は成立しがたくなっているとも言えます。

他にも家族類型の将来推計から見ると、単身世帯が焼く3分の1強になり、「典型的」家族類型の核家族は28%くらいになってしまいます。高齢者層の増加、縮小し、多様化する家族類型、こうした全く未知の条件で地域の再生という課題が出て来ている訳です。83歳の私の母は老人会による小学生の下校を見守るボランティアに参加していますが、どちらが危険か考えさせられてしまいます。今はそのような地域の実態がありますが、それ故に、生協をはじめとする様々な主体のあらゆる参加形態が発掘され考慮されなければ、地域の再生という課題は解きほぐれないでしょう。その意味で、地域の再生は地域の創造です。

3 地域における新しい協同活動

これからの地域社会を考えると、人間をどう育てるかが重要になってきます。重化学工業の時代には画一的な労働力を育てることが中心でしたから、むしろ地域から人を引き離すことが教育の一つの機能でもあったわけです。しかし、工業化社会からの脱却と情報化が進み、一層の知識社会になってきた今、様々な生活、つまり生きるための知識、知恵が必要になってきています。そのような知識や知恵を生み出すためには人を育てる文化や自然がなくてはならない。そのような地域の再生、創造の動きを身近なところ、日常の中から発見して、そのような流れの中に生協も参加し、お互いに支え合っていく形を模索して行くことが大切だと思います。その点で、今年3月の東海交流フォーラムでも報告していただいた、瀬戸のNPO法人「窯の広場」、名古屋市瑞穂区雁道商店街の雁ブラサロンは新たな知恵や知識を生み出す関係を地域で創造している活動主体であると思います。

両者とも、活性化を模索する商店街へ活動場所を求めたわけですが、それは決して偶然ではない。商店街とは人が主人公の対面空間です。それは信頼がなければ継続できないし、信頼を作るためのコミュニケーション(組織、討議)が作られます。商店街はもともと商機能の集積地というだけでなく、信頼関係を資本にしている。それが個人の関係を基本にした小さな活動団体、事業体である二つの組織が活動拠点を商店街に置くことになる理由ではないか。つまり蓄積されてきた信頼関係の上に乗っかることができるからであり、商店街から言えば、その信頼関係を再生する役割を窯の広場や雁ブラサロンが担ってくれるということになると思います。

また一方で、巨大商業施設が建設されていますが、少子高齢化の進展の中で、近隣の居場所としての商店街機能は潜在的に要求が高まってくる可能性があるのではないのでしょうか。窯の広場でインタビューをしていたとき、常連のおばあちゃんが昼食にとりにやってきました。どうやら私たちが座っていた席がこのおばあちゃんの指定席だったようで、そのことを教えてもらいました。そうした居場所がある、受容してもらえる人たちがいるというのは大変重要なことです。商店街の信頼関係やコミュニケーションとはまさにこのように、人とのつながりの中で商売が成り立っているということです。

では二つの活動がどのように信頼関係を再生、創造しようとしているのかが次の点です。どちらも生協活動も含めて活動仲間という信頼関係だけがもともと基本的な「資本」です。したがって、現実的な資本(お金、労力、資材など)はそ

の関係を広げることによって賄う方式になります。つまり、いろいろなつながりを通じて協働できる関係者を引き込むことです。

地域マップを作ったり、地域の祭りに留学生など、新しい仲間を引き込んで新しいコミュニケーション回路を開き、自分たちの地域行事を作る活動もあります。地域社会をリアルに感じるのとはそうした地域の独自の時間の流れがつけられていることです。このような地域のカレンダーが創造されることで、住民のもつ様々な能力も生かされます。絵のうまい人、字の上手な人、そうした個人的能力が地域社会を支える力になり、また様々な知識や知恵を生み出す社会的基盤にもなっていくと思います。そのような支え合う関係こそ、人を育てる環境になるはずで

。「郊外」という言葉で表現した地域は、多かれ少なかれ、どこにも見ることができる現象かもしれません。その典型である新興住宅地は様々な事件を起こす場所でもあったわけですが、それは人を育てるといっておそらく最も大切な機能を形成する条件が希薄なところかもしれません。したがって、そこでは人がつながる、信頼関係を形成する契機して生協の果たす役割は大きいものがあるように思います。他方で、衰退する地域の再生という課題に対する協同組合の役割もありますが、現実的には二つの再生課題は重なり合っています。そのような再生課題に取り組んでいる協同組合のケースを今後、丁寧に拾い上げ検討することが必要になります。その意味で、岡村さんの実践例の報告は貴重なものです。

問題提起2 21世紀型購買生協の展望

広島県生活協同組合連合会

専務理事 岡村信秀

わたしの問題意識

東海の生協のみなさんは私にとりまして大先輩で、こうした場でお話しさせていただくこと、大変恐縮しております。私なりに、このままで将来、生協はどうなるのだろうか？どんな方向にすすんでいくのがいいのだろうか？と悩んできました。こうしたことは自分の関わっている生協だけではわからないことですが、幸い全国のいろんな生協を見聞し、教えられたことがありますので、今日はそのこととお話しすることになると思います。

先程、地域の再生、形成と言われましたが、私は生協のなかでもそのことが問われているなどと思っています。生協として自らの再生を考えないといけな。世の中は大きく動いていると思うのです。そうしたなかで、生協あるいは生協で働いている者や組合員は、これをどう見て、どうふうに生協を形成していけばいいかという問題意識です。

振り返りますと、生協運動は60年代後半から70年代にかけて、経営的には良くなかったのですが、全国的に大きく成長しました。高度経済成長のひずみとして、食品公害や環境破壊などが進行した結



果、当時、団塊の世代のお母さんたちは、食べものに不安を持っていらっやたわけです。子どもがそのまま食べ続けたらどうなるんだろう、健康に害を与えるのではないかと心配だったわけ。そうしたお母さん方が、牛乳とか、当時問題にされていた食べものを中心に、思いを共有しメーカーとの間でこういうものが欲しいという取組みがありました。それがお母さんたちの共感を呼び、

実は私もそう思っていたわと広がっていったわけですね。そして、新しい共同購入という業態を中心に一気に生協が広がっていきました。新しい協同運動が展開され、それが生協運動全体を発展させました。ところが、80年代半ばから90年代前半にかけ、組合員が増え全体は伸びているものの、一人当たりの商品利用が下がりはじめました。そして90年代はじめのバブル崩壊と同時に、生協はガタガタと後退しました。いろいろ原因として挙げられており、大規模化していくなかで組合員との間に距離が生まれたとか、ニーズの多様化が捉まえ切れなくなったとか、競争が激化し勝てないなどいわれます。が、私は組織の内部に原因があったと思っています。協同しあうという関係が薄れていき、結果として経営が悪化した。経営構造改革でがんばってきたわけですが、その中味を問わないといけません。いま組織の内部でも矛盾が噴出しているわけですが、地域に住んでいる組合員のくらしの周辺では何が起きているでしょう。これまで家族のなかで、両親やおばあちゃん、おじいちゃんが子どもの面倒を見るなど、いろいろな助け合いがされていたし、隣近所の付き合いも、玄関の電灯が切れていれば隣のお父さんにちょっと頼んでやってもらうなど、ちょっとした困り事でも助け合いあうということがあった。そういうものが、だんだんできにくくなっています。もっと深刻なのは、子育てでお母さんが大変だとか、高齢者の介護、障害者の問題なども噴出している。

こうして生協という組織の問題と組合員がかかえているくらしの問題が、同時におきている。それらの問題にどう向き合って取り組むかが、いま私たちに問われています。解決の道筋はいろいろあると思うんですが、現状をこうとらえると少し見えてくるのではないかと、といったことを紹介してみたいと思います。

新しい協同運動のたしかな芽生え

新しい運動、これは伝統的な協同ではなくて、新しい市民の協同が全国的につながってきています。生協も元々そうだったんですが、新しい動きが全国にずいぶんあると見ています。しかも、それ新しい取組が母体である生協から分離するのではなくて、いままでの生協を土台とし新しい協同運動と関連することで、相互に地

域の中で影響し合っている。そのことが自らの組織の再生と新しい生きにくさの解決につながるのではないかと考えています。

新しい動きが、どのように従来の購買生協と違うのかというと(図表1)、従来の生協は商品の購買だったのですが、新しい協同組合では地域福祉、福祉サービスであり、対象も従来は特定多数の組合員という限定性がありますが、新しい協同組合では普遍性をもち不特定多数である。また組織の性格として、従来は組合員相互の共益・共助組織だったのが、新しい動きでは公益・公助を目指しており、構成員の関わり方も、従来はシングルステークホルダーであり、新しいものはマルチステークホルダーで多様である。事業規模では前者が大規模になっていますが、後者は小規模であり、その結果、運営も大規模ゆえの間接民主主義と直接民主主義という違いが生まれ、地域社会との関係は、従来では弱く、新しい協同組合では行政との関係を含め地域でのネットワーク的連携が強く志向されています。

購買生協と「新しい協同組合」との4つの関連類型

こうした対比を念頭におきながら、以下4つの事例を取り上げ紹介します。第1は、生協のなかで生まれている動きであり、第2は、生協の外に飛び出てできたワーカーズやNPOとかが生協と協働するもの、第3に単体の生協では対応できないと言うことで購買生協、医療生協や諸団体で協同組合連合や新しい協同組合をつくるもの、第4に地域づくり志向の団体が連携しあい地域ネットワーク型のものを作りだしていくタイプがあります。

生協しまねとおたがいさま

第1の内包型というのは、生協しまねと「おたがいさま」の関係です。おたがいさまの活動は、一見、全国の助け合いに類似するのですが、おたがいさまは全然違うと、私は見えています(図表2)。これは、2002年に生協しまねのなかでできました。利用内容はさまざまで、子どもの世話、保育所の送迎やお年寄りの世話、産前・産後の世話などがあり、現在は高齢者対応が21%、子どもの世話が19%あります。活動分類は、旅行に行っているあいだ猫の世話をしてくださいといった突発的な「非継続応援」、

図表1 現段階購買生協と新しい協同組合の比較

	購買生協	新しい協同組合
活動領域	商品の購買・販売	福祉サービス・地域づくり(公益性)
対象	特定の個人(限定性)	不特定多数者(普遍性)
組織の性格	共益・共助	公益・公助
構成員	シングルステークホルダー	マルチステークホルダー
事業規模	大規模	小規模
運営	間接民主主義	直接民主主義
地域社会との関係	地域社会との関係は弱い	行政や諸団体とのネットワーク的連携が強い

出所: 先行研究を参考に筆者が作成

それからお母さんが病気で長期化する際に、家族をどう応援するかといった「継続応援」があります。この継続応援がずいぶん伸びています。

しまねのおたがいさまは全県一つではないのが特徴です。全国のたすけあいの会はふつう生協で一つですが、しまねでは事業所毎につくっていきます。店舗はなく、共同購入だけで7つの事業所がありますが、そのうち3つで、いま4つめが準備中です。2005年の事業収支は、収入200万円で、運営費収入が49万円ほどあります。これは、時間当たり利用者から800円いただき、そこから、すけっとした人に600円が払われ、あとの200円が運営費になる。ひとつのおたがいさまに対し、生協として48万円を支出しています。あとバザーとか、ハートピアの送迎収入60万円があり、支出として主なものは、コーディネーターの活動費133万円。当初300円台だったのが500-600円台で変動していて、ここで収支を調整し、必ず黒字を出して次年度に繰り越しています。生協からは年間48万円が出ていますが、それ以外は口を出しません。運営も、応援の中味もすべて組合員がやります。応援者は、最初は大変だったようです。しかし、だんだん慣れてきます。早産のため未成熟で生まれてきた子の子育て支援とか、一生懸命頑張っている事例では、利用者と応援者の関係は、単なる応援ではなく、おたがい励まし合って生きていくという関係が基本になってきます。そこでは要求型ではなく、自分たちでやらないといけない、自分たちで解決することが求められます。また利用者から聴くかかないとできないから、聴く力が着いてきます。ダメだダメだじゃなくて、コミュニケーション力が高まってきます。こうした関係が、母体である生協にも浸透してきており、「おたがいさま文化」の優しさ、自立する姿勢を学ぼうと言うことになっています。

いろんなことがやられていて、独居の人で庭の掃除とか水やり、仏壇の清掃など、なかなかお年寄りにはできないことがあって、おたがいさまに頼んでいます。入院中も昼間の支援がないと大変だとか、病院にあったクリ

ーニングがなくなってどうするかといった問題がおたがいさまに持ち込まれ、それらに対応しています。横へ横へと関係がつながっていく人が必要なのかなという印象です。

新たな協同のネットワークとして、社会福祉法人ハートピア出雲では、職員がやっていた学校からハートピアの障害児学童デイサービスまでの送迎を応援できないかという相談が持ち込まれ、連携することになりました。郷里に残したおじいちゃん、おばあちゃんはどうしているだろうかと心配な人にとって、おたがいさまが郷里に残した両親のお世話などの応援により、家族の安心づくりにも貢献しています。また、お嫁さんがマツケンのコンサートに気分転換を兼ねて行きたいと、応援の要請があったとき、私にもそういうことあったよねと応援することを決めた。さまざまなことが話し合われ組合員の理解が深まり、人がお互いに優しくなったよねといった声が交わされています(報告内容を一部割愛)。

生活クラブ生協・東京とワーカーズ・コレクティブ「轍」

次に2つ目の事例は、生協からいったん区切れた部分です。東京の生活クラブでは、全国での個配ではアウトソーシングが大半でしかも民間委託なんです。果たしてそれでいいのかという疑問があって、ここではワーカーズによる配達というやり方に行っている。最初は組合員さんでやっていたのですが、だんだん荷物も多くなって、いまでは外部から男性も入っています。現在、11のワーカーズがあり、その多くは企業組合となり轍グループを構成しています。生活クラブ生協の4ブロックの各センターでワーカーズと職員と一緒に仕事をしています。職員も持っている可能性とワーカーズの可能性を相互に有効活用することが目指されています。パートナーシップで、ワーカーズと連携しあう。11の轍グループのワーカーズを含め80以上のさまざまなワーカーズ(NPO法人、企業組合ほか)が活動しています。ここでは、助け合い

図表2 「おたがいさま」とくらしの助け合いの会との比較

項目	「おたがいさま」	くらしの助け合いの会
入会金・会費制	無し	ほとんどが有る
活動(応援)の内容	基本的にすべてに対応(普遍性)	活動範囲の制限を設けているところが多い(限定性)
規模	小規模性(支所単位)	大規模性(購買生協単位)
事業的性格	生協本体から若干の助成はあるものの、独立採算を目指している(独立採算性)	多くは組合員活動の一環(非事業的)
運営	すべての運営は組合員自身によって行われる(自立性)	コーディネーターや事務局などは職員の関わりが多い(依存性)
地域づくり	社会福祉法人「ハートピア出雲」への全面的応援や行政との連携も進んでいる	地域づくりへの関与は少ない
特徴	新しい協同組合的性格	組合員の活動

出所: 全国の活動を参考に筆者が作成

活動はNPO法人になっています。チラシづくりとか、パンの製造とか、さまざまな仕事をしているワーカーズがあり、生活クラブ生協との関係を含めお互いにネットワーク的に連携している姿が見られます。

共立社・鶴岡生協と庄内まちづくり協同組合「虹」

もう一つの例は、山形県の庄内です。ここでは、もともと購買生協、医療生協などが連携しまちづくり研究会を持っていて、自分たちの地域の事態を調べるなどのなかで地域協同組合連合をつくり、新たな機能を創出して事業を生んできました。そうしたなか、ケアつきの高齢者住宅が地域で不足していて待機者が多いということから、2004年に6団体が出資して庄内まちづくり協同組合「虹」が結成されました。設立から2年を経過し2つのケア付き高齢者住宅が造られています。すべて食事付きで6畳部屋に台所もあって、5万5千円の部屋との8万円の2タイプがあり、国民年金受給者でも入れる配慮されています。

購買生協と「新しい協同組合」の関連構造がもつ意義

まず内包型はもともと生協が母体となっており、そこに内包されていて、おたがいさまは支所単位にあった。この内包型の場合は半自立ですね。そこから飛び出したのが配達ワーカーズ。そこでは協同の台頭が、専門労働や協働型専門の労働となっていて、NPOやワーカーズは自立化しています。また地域とのつながりが強い地域ネットワークという特徴を持っています(図表3)。

購買生協と新しい協同組合の関連構造がもつ意義について、私は次のように考えています。第1に、新しい協同組合との連携によって、生協運動の持続的な場として本体も再生するということです。これは偶然なのかという点で見ますと、イタリアの例についてボルザガ氏から話しを聞く機会があり、そこでも新しい協同組合が購買生協と関わって、生協の持続的発展を支えているとのこと

でした。新しい協同組合の活動から、いろいろな情報が購買生協に入ってきて、それにどう対処したらいいかと議論が起こり購買生協にも反映する。新しい協同組合では、介護のように個別の対応が必要ですから、市場原理に基づく画一的なマネジメントではダメです。そうしたことも購買生協の運営にも影響してきます。

2つめに、購買生協では、ものを買っておしまいというものになり協同の希薄化が避けがたい面があります。しかし福祉協同という切り口では、人と人の関係に関わっていくものですから、つねに協同は再生されていくことになります。そうした福祉協同と購買協同との結合は、協同そのものを持続的に発展させていく可能性をもっていると言えます。

最後は、時間がなくなり飛ばしてしまいましたが、少しオーバーしていますので、これで終わります。

<討論>

地域の再生・形成と協同組合の経験を重ねあわせて

コーディネーター 向井忍 常任理事

岡村さんは、広島県生協連専務として紹介しておりますが、広島大学の大学院で生協の研究をされて博士論文にまとめられ、今日は、その成果をご報告いただきました。

小木曾先生、岡村さんお二人とも、「再生」という点に触られました。協同組合や既存組織が再生しなければならぬ現実があり、そこでどう再生を図るかが課題であると同時に、それは新しい人間関係を形成していくことでもあるとの指摘でした。生協において直面している購買事業の再生と、生活や福祉領域などでの新しい芽とくらしの中の要望に寄り添って考えるという文化が、日本の生協に反映している。そうした動きがワーカーズや事業協同組合など形をとって形成されてきているというお話でした。

図表3 購買生協と「新しい協同組合」の関連構造の類型化とタイプ分け

類型・タイプ		関連構造	特徴
I. 「内包型」関連	A	購買生協とくらしの助け合いの会などとの関連	組合員活動、大規模運営、協同組合的性格が弱い、全国で一番多いケース
	B	生協しまねと「おたがいさま」との関連	自立性が高い、小規模運営、協同組合的性格が強い、内包関連
II. 「協働型」関連		生活クラブ生協・東京とワーカーズ・コレクティブ「轍」との関連	購買事業機能の外部化の協同組合化、協働関連
「地域づくり型」関連	III. 「地域協同組合連合型」関連	共立社・鶴岡生協と「地域協同組合連合」を媒介として形成された庄内まちづくり協同組合「虹」との関連	複数の協同組合が連合し、それを媒介にして「新しい協同組合」が形成され福祉サービスを生み出している、地域協同組合連合関連
	IV. 「地域ネットワーク型」関連	生活クラブ生協・東京とワーカーズ・NPO・社会福祉法人などとの関連	購買生協を母体にワーカーズやNPOなど多様に創出し、地域でネットワーク化、地域ネットワーク関連

出所: 田中秀樹と岡村信秀が協議し作成

私たち研究センターでは、昨年の総会シンポジウムでは格差社会のなかで協同組合がどのような役割を果たすかを議論し、そして“人と人のつながり”を取りあげた3月の交流フォーラムというステップを経て、今回は協同組合の新しい役割を考えようというシンポジウムをもつことになりました。

私の準備した本日の資料は、お二人が指摘されたと同じような実践が生まれているのではないかとを示しています。昨年のシンポジウムでは、既存の購買生協ではまかなえない分野が生まれてきていると紹介しましたが、その後1年間のなかで、このギャップのある分野のなかに新しいネットワークが生まれてきている。めいきん生協で言えば、ワーカーズやくらしのすけあいの会のみなさんと一緒に、地域の生活支援を考えると、介護事業者の連携を図り共通する課題に取り組むなどが生まれ、また権利擁護や消費者被害に取り組むNPOをつくり、自らのセーフティーネットをつくらうということもやってきました。さらに、まちづくりという形で地域や商店街再生の取組があり、瀬戸の窯のひろばのように地域産業が停滞している中でその活性化を図ろうという実践がすすんでいることが確認できると思います。そこで、このあと、報告への質問でも結構ですが、この1年間私たちも地域で再生と形成や直面している問題に関して小さな変化を積み上げてきたという経験を出していただけたらと思います。困っていることも出してもらい、そこから協同組合の役割を考えるヒントが得られたらと思います。また購買生協では、組合員と職員との接点を取り上げたり、学びと気づきの取組のなかで、職員自身の仕事を通してくらしとどう向き合うかという点での経験も沢山生まれてきています。福祉や地域協働に限定せず、環境や自然なども含めて、共通の経験を発言いただければと思います。

あるべき姿を探ることの大切さ

野田輝己理事 (農業)

岡村さんのお話で、くらし助け合いのレベルを踏み越えて、“おたがいさま”があるという感じを持ちました。最近、コムスンが福祉で金儲けの行為に走っていったという問題が明らかにされ怒り心頭でなわけですが、福祉、介護の分野は生協にふさわしいもので、岡村さんが指摘されたことは、生協のあるべき姿ではないかと感銘を受けました。私は農業をしていますが、地価の問題でバブルが起りましたが、ヨーロッパでは土地・建物のあるべき姿が確立しているのに、日本では放任主義がこうした事態をもたらしたとの指摘があります。生協のあるべき姿を明らかにしていくことが大事ではないかと思っています。

地域を支える力と生協の貢献

高井道子会員

飛騨高山のNPO法人ほのぼの朝日ネットワークの高井です。介護保険でいろいろな事業者が福祉に入ってきたが、過疎村でコープぎふと行政と住民の三者が一体になってできたNPOで、グループホームの運営をしてきました。発足からうまく運営できてきたが、2005年の介護保険の制度改正で、看護師さんを入れないと医療加算されないなど、報酬の実質的値下げが行われました。いいケアをしようとしても、弱小な事業者を切っていく形になっているようになっていっています。おたがいさまの報告を聞いて、びっくりしました。私も、生協の助け合いのコーディネーターをやっていましたが、全県一緒にやるという形でしたが、しまねではエリア毎で独自に、仕事の中味も多岐にわたっている点に関心を持ちました。生協法の改正により、地域が大きくなることになりました。しかし、岡村さんの報告にあったように、生協は大きくなって、協力の力は弱くなっていると思います。地域から支える力が大事で、そこでの生協の貢献が大切になっており、そういう点をもっと掘り下げ研究してほしい。

改正生協法に込められたメッセージ

コーディネーター 向井 忍

生協法の改正で、生協も経営的に大きくなっているから、ガバナンスの面でしっかりしなさいという点と、同時に従来の教育費用繰越金の地域還元もできますということになりました。蓄積した財産を地域社会で使うことについて、協同組合の教育として捉えて活用できますという改正が盛り込まれました。相互扶助、公共的な役割が生協にはあるというメッセージと、生協理事会の社会的な責任が増大していることへの対応というメッセージの両面が提起されています。制度改正の中で、どう考えていくのか大事な点だと思います。

地域に関わるマルチ・ステークホルダー

中島悦郎会員(めいきん生協)

小木曾先生が地域の崩壊を指摘されましたが、子育ては地域の仕事だと、あたりまえのように考えてきましたが、最近、そのようにいってもアホかと言われてしまいます。岡村さんが購買生協と「新しい協同組合」の関連構造が示され、4つのパターンが出されています。めいきん生協では地域でのネットワークを大切にしており、ワーカーズや地域団体との連携を、パターンを決めずに地域にあったやり方ですすみましょうといってきました。整理された4つのパターンにより、いまやっていることや、



今後の課題がスッキリした感じですが、ただ、やっているなかで一つは、地方行政の役割をなぜ生協がやるのか、なぜ行政がやらないのかについて悩んでいます。もう一つは担い手づくりのことで、マルチステークホルダーという提起があったが、地域には元気なおばさんが一杯いますよね。いろんな方がいて、これからは定年退職した団塊の世代も大事になっています。生協の職員も、もっと地域で参加できるようにしないとイケないと思います。自分たちの孫などを考えて参加したい。係わることで参考になることがあれば教えて欲しい。

社会福祉の原理を踏まえた協同組合の実践に

仲田伸輝理事(名南子どもの家)



岡村さんに質問させていただきます。示唆に富んだ新しいネットワークのあり方が勉強になりましたが、社会福祉の分野で活動してきた経験から、社会福祉の原理的な問題について協同組合の人のなかでどう議論されているか知り、みんなで議論していきたいと思うのです。

現段階購買生協と新しい協同組合の比較がされていますが、社会福祉の原理とは何かとか、社会福祉サービスの特性とは何かについて、もっと深める必要あると思っています。社会福祉領域の制度が大きく転嫁してきている中で、こうした形が出ている。例えば、応益負担か応能負担かは社会福祉を利用する方にとって決定的問題なわけです。あるいは社会福祉サービスは、現物給付か現金給付かの問題も大きいことです。コムスの話も出ましたが、措置から契約に変わって、その契約の中味とか、利用者との契約か地方自治体との契約かといったことは、利用者の権利にとって大きく影響します。協同組合の福祉に期待するわけですが、その前提的な原理を欠いた議論だけでは、結果として、憲法25条で保障された生活や権利を守ることができなくなってしまうのではないかと危機感がありますので、研究センターの中でも大いに議論する必要があると思っています。

地域再生を支える地場産業や地域経済は

赤坂暢徳会員(中京大学)

小木曾先生が地域再生についてお話しされました。ご専門との関係で地域社会のことに焦点が当てられましたが、担い手の問題が重要で、都市周辺地域や中山間地や島など人口が減少して地域は、大都市や、県庁所在地など人口が多い地域とは違い、担い手がお年寄りばかりになっているという問題があります。そうした地域でも再生を考えないといけないのですが、そうしたところでの地場産業や地域経済との関係をどう考えたらいいの



2001年4月5日第三種郵便物認可か、教えていただきたい。その上で、岡村さんに、山形県鶴岡の共立社での庄内まちづくり協同組合のお話を伺ったわけですが、私も3月末に鶴岡に行くと大変ユニークなまちづくり

協同組合を見てきたのですが、こうした協同組合が広がるかと思ったのですが、鶴岡だからできたという面もあるかとも思うのですが、他の地域での可能性はどうでしょうか、お考えをうかがいたいと思います。

コーディネーター向井忍

出された意見、質問は、およそ3つぐらいあるかと思います。一つは、協同組合の実践が、社会福祉の原理や権利の問題に照らし、単なる受け皿としての説明することなのか、あるいは現在の政策に対し協同組合の実践がもつ意味を説明でき、一緒にやっていきましょうということになるかという問題、二つめは担い手づくりということで、組合員や職員の参加、あるいは担い手が限られている地域での担い手を育成する条件とは何か、最後は、事業的な協同組合ができる条件は、鶴岡固有のことか、東海でも可能かといった点になるかと思います。質問にも答えていただきながら、ご発言いただけないでしょうか。

難しい住民と行政の関係、役割

岡村信秀

生協が行政の受け皿とか、下請になっていないかという点は、私も悩む部分です。コムスの例をとっても、彼らは明らかに間違いなのですが、背景は生協でも共通しているかもしれない。規制緩和で民間にどんどん押しつけてくる。どんなに頑張っても、それで本当に剰余ができるのか？と言うことが、突き付けられていると思うのですね。

調査に入った過疎化が進みお年寄りが多くて病院もなく大変な地域だったのですが、行政と住民一体となって病院が作られました。関わった住民なり、行政の人たちは、よくわかっていらっしゃるのですが、それ当たり前になった若者達には、先輩の苦勞が分からないんです。そうすると協同が生まれません。この町にとって良かれと思ってやったのだが、住民はバラバラになっている。私にも、この点、いまだに解りません。人は一人でいきられない。行政がやりすぎることによって住民の意識が希薄化する。どうしたらいいのか、私は答えを持っていません。

担い手と経済の問題ですが、私たちは地域の中で働き、生活しているわけで、地域で経済的に成り立たないと続けていけないわけです。だから購買生協は、もう一度、

地域の農産、畜産、地場産業など地域との連携で経済を成立させる努力が必要だと思っています。担い手問題では、これから検討が必要ですが、地域には、さまざまな協同組合や元気な人がいます。生協の場合、経済合理性が働きますから、利用が少ないと配達しにくい。けれど地元でとれた物を適切な価格で配達しながら見守りとか、生活応援ができないかと考え、それを誰がやれるかという、年金者にはボランティアでやってもらうなどの連携をしてはどうかと思うわけです。おたがいさまでは配達もOKです。

ただ、鶴岡のことですが、どこでもできるかについては、現地でも聞けば聞くほど特殊性が目立ち、しんどいなという印象があります。連携は可能だと思いますが、庄内の経験に学びながら広島などにあった方法を探るといことですよ。庄内は自治体と余りうまく行っていない。

地域の課題を誰がどう担うかを決定できる 住民、住民組織に

小木曾洋司



行政との関係では、NPO が使われているという批判は随分あります。ただ、どこを行政にはやって欲しいかをしゃべれるようにするという、社会参加のもつ意味を生協でもきちんと議論していただきたい。

そして、自治体でも地域社会

でも、これまでは高齢化率などの指標の違いがあるにもかかわらず一律でやってきたわけですが、地域によって何を行政にやってもらうかの違いを認めるということが大事です。住みよい地域とは、住民がやっているから住みよいというだけではなく、行政の役割をきちんと押さえたうえで、住民がやるということが出来る住民組織や協同組合がでてこないといけないと思っています。行政の肩代わりかどうかではなく、地域にはもともと共同してやらないといけないことがあって、それを誰がどうやるかという仕組みの問題なんです。それを決定するのが住民であり、協同組合であるような“社会参加”をつくらないと思う。どちらが公でどちらが私かの議論は、行政と対立することになりかねない。

地場産業というのは難しい。足助には木こり塾など外から人が入り、地域を支えることが始まっています。豊田市のワクワク事業ということで500万円を支援する。足助ではこういう形は受け容れにくい人もありますが、都市との交流については、いろいろ組み立てる必要があります。ただし、それが経済的に食っていくというのは困難ですね。中山間地で機械が入らない農地は放棄されていく。ただ祭りが地域にきちんと残っていると、若い連中は結

構帰りますね。自分たちの記憶とか、ストーリーとかが染みついているところは残っている。それを産業とか、都市との環境問題などと橋渡しできないか考えてみたいと思っています。

地域、新しい協同組合の役割を考える キーワードとして

コーディネーター 向井忍

今日は地域の再生と協同組合の役割というテーマで議論してきたわけですが、再生と形成の二つを同時に追求していかないといけないところに、難しさや大変さがあるということではないでしょうか。議論を通し「地域」ということがキーワードとして浮かび上がってきたのではないかと思います。地域のなかで協同事業の担い手をどう形成していくのか、そのことをめぐって制度、政策と私たちの実践との結びつきがあると思います。協同組合は地域から離れることはできないという本質に照らして、地産地消とかについても考えていくテーマだと考えます。担い手についても、高齢者の方に係わり、担い手も単体ではなく、さまざまな人が関わることで担い手を形成する、あるいは交流を通して形成されるということがある。旧来の生協のなかの組織文化だけで通用しない公共性とか、担い手同士の連携のルールとか、連携の仕方も絡んでくると思います。地域のなかで連携する際の協同組合的な条件も議論になりました。これらは新しい協同組合の役割を考えるうえで、大事な問題ではなかったかと思えます。いくつかの深めるべき問題が出てきており、これらの問題を今後追及できたらと考えております。貴重な報告をいただいた小木曾先生、岡村さんに感謝して終わりたいと思います。

この報告は、2007年7月7日の研究センター通常総会記念企画として開催しましたシンポジウム「地域再生と協同組合の新しい可能性」の記録に基づき、編集部が責任で要約構成したものです。

委託研究 レポート

ごはんたべよー会から —しあわせを広げたい—

伊藤小友美

「ごはんたべよー会」の前身は、「ものづくりの思いを聴く会」です。思いを込めてものづくりをしている方々との出会いは、たいへん貴重なものでした。ものづくりの思いを聴くフォーラム・フィールドワークを通して学んだことは、「食べることは生きること」でした。

日常の食が大切・・・とはわかっているけれども、私たちは忙しい。食事だけ作っているわけじゃないし、仕事もある。地域の活動もある。生協の活動だって。その上、主婦で、母で、時には祖母にもならなければならない。朝は一分一秒を争う騒ぎだし、夜は夜でやるのがいっぱい。ぶちあたったのは「**現実**は厳しい」ということです。

そこで私たちが考えたのは、昔からの日本の食事を大事にしたいということ。毎日の食事を楽しく食べたいということ。「**あったかい味噌汁とご飯**から」始まる食卓を大切にしたいと考えました。

私たちは、一週間自分の食卓をさらけ出し、食卓調査をしてみました。書き出すことで、さまざまなことを感じました。もっとたくさんの人の現実の食卓を知りたいと思いました。その食卓を幸せにすることを考えていきたいと、研究センターの委託研究に応募しました。そして名前を「ごはんたべよー会」と変えました。

現在、「食生活に関するアンケート」「一週間の食卓調査」に取り組んでいます。回収作業をしながら、分析のための準備にかかっています。メンバーの出会いは、2005年夏に豊田市のマズカ味噌で行われた「ものづくりの思いを聴くプチフォーラム」。2年という歳月を経て、個性豊かな「ごはんたべよー会」は、おにぎりをトレードマークに、結束力もおしゃべりも日々パワーアップし、がんばっています。研究会を開催するたびに、順子さんの手書きのニュースが届きます。

<メンバーのつぶやき>

- *若い世代の食卓が知りたいな。60代の食卓はまともです。(N)
- *皆さん手作りの食卓で感心しました。焼き魚と味噌汁だけでも愛情込めた母の味を大事に考えていることを嬉しく思いました。(M)
- *まじめにきちんとくらしている食卓調査をみる

- とうるうるしました。みんなちゃんとしています。(J)
- *よその食卓を見て、我が食卓を反省中。(K)
- *食卓調査のお願いをすると、「ええ?!」と困った顔をされる方もありましたが、楽しんで協力してくれる方もいて本当にうれしく思いました。(F)

SEE YOU AGAIN
8月21日

ごはんたべよー会
No.2 ニュース

みなさんお元気ですか?
この間といっても 6月28日の会議から もう4月たってしまいました。
あつあつ(汗) 新鮮(汗) なニュースが届くはあが(汗) こんな風にひらびてしまい(汗) 申し訳ありません。

あんなこと言ったら...
と思いついてもらう ツールになれど嬉しい限りです。

やったこと
① 手にした食卓調査をじっくり眺めて考えたこと わがたごころ、2人のレポートから みんなで話しあう(シセP、井貝)
みんなよくできた主婦(はらかりと言っちゃ言いそぎではない) → レポート参照下さい。

8月21日(日)
次②までに
1. 自分の集めた食卓調査をよく見て、気づいたことをまとめる!
2. 身のまわりの食にまつわる話(なんでも、おしゃべりにあわせてあげようって思うの)を集める。食の風景と命名。
3. 今日の参考資料をよく読みこむ 全国生協組合員意識調査や他の研究のアンケートも参考にしよう... *
また アンケートはあと200まい集める(現在143まい) 書籍紹介も含めて
食卓調査もあと少し集める

言葉にしたいのか
あのミートホープのコロケ!!
生協にハマる
あーだ、こーだと言いつつ、これは愛情のうら返し。愛してる生協のあのミートホープのコロケ!!をみんなに大きなショットを与えたい。
生協だから! co-opのマークのブランドかは まだまだ 可愛い
生協のできこうだから 手ごりなくちせ...とか 言うように使わなかったら、悲しい!

やったこと②
六華花見学
昔の金持ちは
えらい、みんなのために
お金を使った、こころ
よくなりました。

「岩村陽子」せんを読んだ
わたしたちメンバーとして、いや、途方にくれ、
研究の方向は... とこに とおしゃべりを見せてきたことは

書籍紹介も含めて
マイクマガシ社
藤沢 雄二著
「こころで読む日本の食卓」 六華花 詔太郎

委託研究
レポート

食育絵本制作をする“M&Tプロジェクト”

椋木真佐子

■委託研究応募への経緯

今回、委託研究応募にあたりこのユニットはそれぞれの頭文字をとって「M&Tプロジェクト」と銘々した。生協組合員の組織活動としての産消委員会を「食べる人とつくる人が手をつなぐ会」へ改め、地域の生産者との交流活動をしてきた実績がある。そしてその活動の足跡をレポートとして「コープぎふ生協の今とこれからを考える研究会」作成の冊子「センスオブコープ」へ掲載されている。担い手の2人が「研究」に少し耐性があるのは、チームで取り組んだ研究活動(「個の時代に班の意味はあるか」:2001年度くらしと協同の研究所助成研究)でコープぎふの共同購入班の実態調査のためペアを組み、注文商品の荷おろしの現場を追いかけて組合員への聞き取り調査をやっているからだ。意気投合ぶりは調査のまとめまでを興味津々でやりこなせたことで表現された。次のチャレンジとして自分たちサイズでやってみようということになり、今回の応募に至った。

■「食育」というテーマについて

以前、生協をホームベースとして二人が取り組んでいた

のは、生産者との関係づくりを進めながら農産物について学び、それが農業への理解にもおよんで、「食」が何であるかについての自覚を深めることであった。そのことは、食育基本法が制定された今日、「食育」という観点から捉え直してみることに意義を見出せる。また、家庭の食事づくりを通して家族の「食」の管理や家族の健康管理の担い手として、ライフステージの転換点を意識するようになった今、自分たちの経験から伝えるべき何かが見つけられるのではないかと、という動機に拠るところが大きい。

■絵本製作へのこだわり

「なぜ絵本なのか？」それは、「研究」という形や成果に修練させることをねらうよりも「絵本」という存在のほうがより次の実践を生みやすいのではないかと。また、M&Tプロジェクトとしては、イート(eat「食」)とアート(美術)を共存させることで、くらし人に対してより楽しく伝えることを目指したい。それがM&Tプロジェクトとしての等身大であり、等身大に磨きをかけようと言う目論見でもある。

地域と協同の研究センターでは、2006年度に食と農、地域福祉と市民協同、組合員と職員の接点という3つの領域で、公募にもとづいて調査研究の会員への委託を行いました。現在、11テーマで個人・グループによる調査研究が取り組まれています。

この委託では2008年2月末日までに調査研究の結果を報告書として提出することを求めており、その成果は会員みなさんにもご報告することを予定しています。

同時に、委託の進捗状況を取材させていただき、どんなことがやられ、どんな点が解ってきているのかなどのプロセスもご紹介したいと考え、ニュースの各号2テーマ程度ずつ掲載する計画でいます。楽しみに。

なお、第1期の委託事業の評価を行いつつ、今後の継続について検討する予定であり、来春には会員にご案内することができると思います。

INDEX

巻頭エッセー 今、あらためて協同と地域を考える 水野隼人	1
2007年度総会記念シンポジウム	
向井 忍 (研究センター常任理事)	2
小木曾洋司 (中京大学)	2
岡本信秀 (広島県生協連)	4
質疑討論	7
ごはんたべよー会から ーしあわせを広げたいー 伊藤小友美	11
食育絵本制作をする“M&Tプロジェクト” 椋木真佐子	12

2007年8月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事 水野隼人

〒464-0824 名古屋市中種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com